# 高世貞茶記 六

へ 懐 13
1692
6

特へ13
1632
6

三木与

# 當世貞女容気　壱

同孫

## 一　心を淀髪

消残り表へ出る櫛の油
切るとも手ぬぐひ
縁の双六

さいころ

孫ぐるね

尾上の鏡
なるのでも

油煙墨形

一年の御祈祷

二

作福貧乏の者

付タリ 拾弐つの芸能の鍛冶屋の事

知恵智慧ありしを包む泥島義経の男

三

さいてねるの女の子の人妻

付タリ 地獄の様子切禁の義くそうの女房

うき花の乱波たいの母かくる夫人

うし笠

京都帝国大学図書

一 心と決撃さのたちと祝ぐるあ油煙墨屋

女出所粧こそ知ぐ知ぐ知ぐ出出人よ親公

かきれんあるぐるよあぐず。よぐぐよそる年ぐ母の閉宝

えぐぐぐれ繁なげ家お襟垢の付きるいとよんぐる

しく自ちの手性所ぐ知ぐ。さいと又母貴去のごく

餘ぐよあるる母ぐ白粉昆布こ知ぐ。首筋ぬき

あげ弟ぐぐくる居行所ぐ武ぐ母ぐ母ぐ

悟ぐよ地ぐぐぐちせん女ぐ

町人の妻女八分一男神世弟ぐ親ぐ武家ぐ義ぐの仮ぐ

況ぐすぐぐぐ。ぐ知ぐ知ぐ墨ぐ。ぐ起ぐ法ぐ

いのりのあぐ。ぐ毎八海ぐぐ知ぐぐぐぐぐぐ

ある年寄女をそれぞ捨てつゝ次の女をもらひけ。石屋うさ
ゑうくおさいはせて。病中にも母の事をいひそ
うすゝぎず今のかたうさ家の母となる。何事もおもむき
ゆゑ指図と指図とせ。その名ばかりの名代と
ようけ。一家親族の然獨るとけ今れ六年来世
一方中郷まる人の指図と結ぶ。商賣とうちけ家業
仕換じもつく世るのこひへも裏浦ゆ作りしよ。今ようの
こゝも家ゑ人わく。ゆき年かい部ちうて扱人ゆ家して
の力前ゝぞう。俵代くり乃貸商賣渡貸の仕組也品
ゝくく現金ゆ家屋ニ万五田地八町是を今ゆ
家ら儲うけく郷すくよりゝぞ。結事母の扱さと遊ニ
いづまも承知ゆ仕りき。母も安いこゆ家ゑのたけまぞ。ニ年後

ゆ成りく妻のゆ出年結ゆ母ゆ一如ゆ去て去うる
如ゆ以ゆ事ゝ去ゆ酒とのゝ。今日年ゆあまて俵ゆ離女を
聞と年のゝ。浪世ニ康保のこわゝり家ニ扱のゝ家うゝ是后
ゆ相云役去ゆ子ゆの評判ゆ言ゆ聞ゆ。ゆ去人の三年
ニゆ世事ゆ内ゆ云ゆ雑化ゆ結ゆて其事ゆ人ゆ
年ゆ家ゆ去ゆ云ゆ遊ゆ云ゆ今ゆ結ゆて結ゆ事
わゆうゆまゝ。世ゆる。ゆ社制ゆうゝ。ゆ
ゆ今云ゆ嫁ゆ成ゆ結。ゆ逆ゆ去ゆ年ゆ他ゆ
のゆ家ゆ。ゆ年ゆ一ゆ人ゆ子ゆ事ゆ
ゆ。ゆ結ゆ去ゆ実ゆ代ゆ雑
だいをいひけて出ゆ結ゆ世ゆ結ゆ事ゆ聖ゆ
あゆ出ゆ出ゆ事ゆ結ゆ事ゆ御屋敷

さねの御ふあ〜もんがわるおく。下男ごう宮はよりひ。ろよ宮
ぜあ御家ぐるいに石わるび。家門のざろく高貴の邪魔や
ぐてしまく人よりろうん事欲り〜く。宮生、郎と母の美
見ずいぐん宮のうあ〜ゆ〜まゆせども。羽のろ〜ぐどどめ
ぶひいきげんの抜ぐる時さ。ぶろくろをりとん会せ中よ
なろうつ。劉宮生ろとう北関花をとまよ元形〜。
中く身袋抜ずぐさ。代表西所一四里切中中花
ぶひ。母のりうん宮ろ屋ろ〜とて。効面抜よ付ろ
ま〜ぶろとて宮分ろ中ろ。おと〜ぶろんど
ぬくと自宮するうう。絶母ぶよせんと抜ぐ〜とぬきけ
ろど。町人会是とぶひ発ぶろねども母ぶろのよびろてめる
の敵邪曲中ま抜り。竜金仕ろぐぶひんろ。ぶと母ぶ

抜ぶも見ぐぶ。いよく好ぶと抜袋の滅ぶ〜ぶ男ぐろひ坊
ま抜ひ抜ぶ女の風ろんま金まぐきんろと。ぶ中の名ぐぶや
まぐりけり。ぶま同〜ろ形のうちま。ぶびぶろ宮外ひぶあ
まおろんきて以ろぶ。人ぶねぐ宮ぶろ宮みぶ外よりせまぶい
抜ぶぶぐぐ考〜抜の中ハ人ろ。ぶのしぶ。ぶの羽ぶ宮ぶけい
やぶ。ぶねぐ宮母ハ月ろ抜月絵墨ぶろまろ。ぶ。ぶ。ぶの
抜地ま海ぐ。町ま通抜〜く。海細工療抜ま母抜ぶろ金
の抜袋金一ぶろく言ぶ母ろねぐ中く表面の抜ぶ及
びぐ〜。抜ぐ門流ぶて母ぶ人ぶんま宮ろへろぶぶきと
宮抜ぶ人ろ会袋のぶ。ぶぶろ抜びぶろ雑袋抜て
力ぶ母ぶ〜。ぶまや始抜ぶろと母宮ぶ宮外ひぶろの氣
袋ぶ母抜ぶ。抜ぶ人事ハ抜ぶ宮外ぶろとろ月ま

古来れ所伝日よ御向河へ乗船。古人の籠会御免の条
ねがひもうしそ。その時御会あげ申ひ。ひまの月と
の所よ一条も女の形ひよ。ひまあとのうるる。は長松のう
へ無そ〜ゝと沖指へ入るされ御仕味とるさ海よ。人体わや
海り申るゝ〜ゝ。ふよもけ。ばず。南う海よ食を。稲ざ稲
来たるぞうこ。ぞう〜母ざ物者は云るれ。ぞ花ひ。ひ
と六月うう〜ゝ御りんのうくゝ。ひかゝ行せ使れ者うう
ぞうこげれ。ぞ人さうれ〜ゝ。みぞと云ものつぶ神よ。ゝ。
ぞうよ。ぞ人のたばる。ぞのうと。梅兵と立逝。ぞ。ぞ
ゝすうゝ。ぞ。ぞ。ぞ

おろしあけ。珍客来舟ハ当年かりもきてもれなく
ふるうと一ぱい接ケ代ちの仕者ハ多くをれ。つぐ世のを
さ風代をろぶ。うしもうそて一番の分限者とゝそれを見
去屋ハ見ゝの内ハ男神ぐれくらぐくくく

やして安あるべき事なり。これ皆人多くまどつとりてわすれ
ぬ雅楽を所作に出て金とれたりけるあり世ところの長者
し人家をとりて祈るよりぬべきなりこれ世ところの世ところ
家もよろこびをなすべきぞ。わすれこのときの弟子とつぶと世世
よりはげしくはたらべし

## 二 作病わすれて離れぬ者の事

世よ男女の中かくおろかしきなしいかなるまにれ品の中
なるもの。よく嫉妬する嫉妬するくして常かの恋ぞうまく果てわ
ぬるみ世相なるなぜ。されどもさきさ世様よりかたばな
んくいつまでくわる事ぞう。又ゆくも是ぞ男それも又
一月ごしよりうそをくるぶ。一代よりなりすれ
ぬきくひ世なるはげしくとおりくばかんいかてこれ多くあ

いつ俗世なぞうくこうまよと京月ごしろ遠俗細の識者場
屋出たる男女小長くいひくいそをおまて人のめびよわ
こる長屋をくく。中ものの物月より出立所伝にこがれくつき
歩行男教えれなど中まも婦川物世屋ところ地伝世手決。
ふく小長世相びくく。十月の法花会式の日学世様くく
発遣る俗りわして動そそれ小長ぐ相よのわびぬもかひろ相
なくくびは男ふくはひつくくくけれでいつくろうてる
わくくびすまてあてたびくなる世はれ皇たびよ屋
つよかてんくるくく世くく親世ふろふ相ぬよあ人のはあ
月ごさびくく月をくるるくばきなるわのせのそそくて
思ひをくるくく事でわられるかれ者所の文庫屋立長出
いつそ小長と俗事ぐくの伝云教教中ものよれ伝相ぬ方

津の狂歌堂。門流ばかりにて世をさとりすでに日限
も極まりぬ。是をと書とゝめ置くとて
さはりなき月の出の光代もたらなる坂の峠にて今
我の宗匠仏へ和尚ばかりにて行のもす
海しるべ。御よ今れ出たりうぶ馬沈蓮よれるまたたきな
る仕合。是小まこが是是のすぐれ世でいのでも知るる。
これ仕事見ていで愚古たらと申ねびるまつて。これ
世るく侍て辛苦今我の出の中よりく和尚ようん
もそうでこそ。又我本やこ手決すてもも亦家嫌とと
風流格よいくへのそのみ指番拾くれし去れいふうこの遠
今日。小まこれ仕なくく物をいこむる中たるもそ拾。
猫のねいと新ろう是業まわ拾ゆめ。二月十三日の歌。文庫

（よもあ入して二たらとふるぬのうるべ松。心の庭よ去手決とふ
ふ小まこ八かけごあう拾ごうる拾ごう文庫屋の書こ拾ろう。年仕ろさ
ねるうごで世のう家拾ろう。去手決もち物妻女と拾て是も
安ようひで。すねごもも。小まこうとこれで仕いう時こい
ろきごもこ所を迫ろく文庫屋の門と西ろ。家いとのぞ
米小まこが面新すてうわがるうびく。小まこもこ手決くん
つけし時拾ようこ所も落新を月屋ろと
くも。拾ろいくあるう。今ろ捨ろうさよ。まのいとんざ
すい立場のうひいごあいまの一ろ。拾ろ人さいりあ中こ
ゴ月のうくこをけうあろう筆。ろるよ去手決が書屋妹ろあ
いこひむすぐうぶ。去手決もこのこのいかて中もなく
三年よういこ夜の拾をかうくく今い拾ゆこいのときるく

小さきたちよりいとなもうしたるこそ
男よりあくまでもあさましきものなれ
とげんこうぞうもおもくへんてい
かねもその年ごろ信ぜざる者の沙人よりたちけるへ訪欲
まよ換とうん掛くへ高しい。たりうよ方半ぬうもげ判形せ
し石祝ものあくまでいつ代のかねいよりるおろ。もよ代
ろ人間信ぐくたちの引願。そよあはぐくの急張帰う。京
の問屋八幸清のあつりひさねぐくのあ住会おつぐ。これと若
ようくたりう帳面をうづくひ。縁よ杖うで友衆を撰る
ゆくしあてせんくるう。代くの商賣とは時住ゆてく裏へ也
放西屋をへよ貸て茅ひつ地くの用あけ。中まを是社
よ松ちぐれたる松ちとうんたてくいくあ八ぐくまで。初ちあ

けるこんさこの世をさりしかとこんうを
おくこうねどくく。おもかたはるとうとれたうとうとひうう和
ねんねんこのよろこ事と孫者よ杉くくまわうくせいりんとうあ
世事とはなうう。男とうはうてて女とううどさうこう育所
のよよこのまいくあがくるまんうどをうて。ろ切こするうう天
たいですくこねいんすでにる年ごあいこ懐性ぜるるいうこと
いるうくるるはびして。十月ゆよ安く産さうも男子にて兄よ
二役のうどさえねど。家して育成人するるうこうどい待よ
いとうどうも。十ゆして南へれいせて教れ後代よ孫ゆとゆいせ
ひくくひいうくのとううとやよいどきも絶ゆくくなさ金
張こ事ゆうけうくかうるよ。会くこ張八要ゆうるゆこれて
事くどいのえまづゆ。ゆ年よ仕会ちうどゆこいまゆうれ云

の年。現張こ名男月とせけんのさづとうけゆるうちびせ
うれ皆毎小ゆうど兵ゆくさゆくでう。我年屋ゆ手決ハとうくい
事ゆをこれうゆくこ。一生和の安屋とりぶ浅ゆよ事とるは
しくゆ代うてて。ゆ和ゆは町ゆうゆうを坂市をゆうれ
ゆる

三

指くぬぬ刀のうゆ名ゆ人遠
雪ゆ指風深うれく。付ゆ白く出る秋の月。関坂品たうとよ
俗ハ首の周俗の城下よかれるゆうゆ男。妻女と同ド家中
向屋なくゆ自女ゆうて。ゆうゆ市別式ゆうしゆ品たうゆ系
ゆくの御供番ゆゆるゆ。ゆるの用彩ゆ相勤ゆ場去十歳
品たうゆ女ゆ子ゆ抱ゆしくゆ。ゆとゆ安ゆくゆきゆきんと傑
ける平ゆの和ゆううゆくゆれゆ。ゆるゆ白尾ゆ安ゆ出御城下の

新橋を渡ると、まづ、かの、ゆうれいの、はなしをしてくれる。
おてくめ、けるすよ。男、人、相撲、ぢ、ぢ、
屋、住、過つきぐ。ぜひまるぐ、まて、長まのきいもる、おと。十義
の合せ、拍子、しづまる、皆、屋のおるれば、ぢ、ぢ、これ、ぢ、
ひいてう、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、ぢ、
ぢ、ぢ、ぢ

ゑとそうく呂ひ河がぐし。これ世の怪ゐとかてをぐもくで
さきを捨。武士の妻さる分がたく人歌と教さるれぐとそ。ぐこ
挺のうぐ〜ぐきうぐさろとそ。西むきに鎧めくのみ。ぐそ
伯富せとふそれるこの事ようと。悪云吉よわるれぐ。ゐ伯ゐ
きぐ。十義ようあびうるくかてしが。伯ぐるまうけそがんあ
のくくはは女きうぐりてしんゐいりんへ。地のれが安月俗よひ
ふまんはゐゐぐ行くぐ。ふ義ぎよあくゐの一ぐんぎぐ。尚
和とぎのくくゐを一向女の歌白尾和〜出と伯てすんぐう
とゐ安分別ゐ義ぎを。私宅ぐるくゐ色弟出可ぎ〜〜く
面彩町のぎよあのびうぐぶよ。白尾和〜出儀安。石ゐ女人
回ゐて。出安ゐへ行ぐしよりをうけぐ。ゐ伯ゐぎ伯ゐ対
んくぐ女れゐうぐ呂ゐたゐが歌ぎうぐ女はんをぎくしるよ出て

ゆるぶ。私宅へ来るのあつくらひまつとかてんと呂つよ呂お儀元抵
姫とをるよりうまれだ。そ内を伯会する事。件の迎おあれ
きらくれあいさうのうへ。ぬ〜ぬ出ぬんぐぞうと云呂とかて〜ゆ
ゆはまてれなくとうまを。云文さいあるよあるこてくだ和
抵灯とも一帝家来とかうもーとく。婚姻の事。自れば。あ〜ぬ
家来とかつつれかてをる。かてこい十歳義ようもかぐ。わぐ
ちすすーてて月をでたの間よこ階松のちゆーんこれ自を
亜がかつつれくるる去性はあ〜ぬすとこうすどしくぐーろ
ち一刀よ切とあぐでかムうろてさぐ。ぐよ十歳いぐとと
名義〜く上来。せうをるぷちゆーんおいすげ呂ぬ中ぬく
ちつせ。そのちちあるこけてあ〜ぬよつをとかろりるぬ
陸よ呂ちあ安義。云ちえぐ。行きてる場ぬもかけつひぐ。必ぐ

見八坊名十歳。ぐけうーよあぐをひうけしとせーカ人せざる
を紙ようちく。男云ちえ。行けく立のきあぐ。ちつぐのきあ
くさきを指ぬて後とひしよ遠事ぐとぐ義ようを
遠ケ。十歳ぐ呂時ようかてを呂ぬとわくぬをてて
ちうけぐ。相文也あるぬ遠ようぬ遠とはぐあ。とのくわま
けくぬるよ。をはつ去ちえと人の海ぐよようて泉ちえ
ぐ。あよ八坊名十歳りをを私宅とをあかけちてぐぐち
くなれぐ是ようぐ後けくぐ。相呂ちの女房をとをけぐ。これる
ぐ呂時ようわぬくぐくいぐけあも来くえ呂ちつあもの間。十歳と
ち義の家を〜ぐ。これ抵去ちえようぬけれけむたく呂ひ
ちくく立の抵しと。是ぬ歳ぬ。しく。嘆ぐ内坂呂ちの安家よ
ちぐ。女房とをちをれちるちえあつぬゆちとこの男よ相を是

を結び武蓮よつをたる事有。そのく畜生を形り拾
ひもの。時白尾なく恵あるよりてもまぶ。一云ひてどこも
わくひすをがみ武とひとこと数し。歳代未聞の恵人いな
るられハあんどと知りとりあげ。これもやはりとちのをける
つ屋のかどくらたれもの。るは阿坂見たりハ京都ハそはは
と仰せ。武士ハ仰せ立ハ御所を下されはしるも十義
はくちくるを儀よりく。みて御ろ者もるべき事ごを
ごこれ愛撫のよてを。為るいれどもをちをくへりを屋
の道よりくをちてうはほのふまく。大ハの川筋を面へさ
してゆくをよ。見ろがさい女是も十義ををくはれを御
細しけるが。者のくすてりちびさまよん付見たりつをて女
房とみををを。己義去新の歌十義がるを歌ををまを



ヤをぞくものがれ。今。毎人なるべく前をとりおと奏を
づもる。女房なるべよかをされぶくあまとろくふをつを
ハくをいをぶをてわろくその御桜分るをず。見ろかく
がてんせをて。己丈の図をかをめふをするれどの女ををるをを
もなく。今ちくちんをて金代ををとうんとするをもしをを。その
比奥をすをるを恵事ををいをしけるを。結りるをよりも
れよさんをををれあをける。源ふをいあくねををくをの場をを
る場和へをかけつけをを。ををまりて十義ををりけしやをを
とやくうをなをりく。世を石義の詳れは義をのくいのれ
をくく見ろをまを女房が貴代ををく。十義ををるをよ十義
られ代やく。をををのをれををして。団遠の振をを
後をろく。すをは川へ来てををけを。見ろいを代を人代付

をれば。女房といひわたされたれの十郎自害しけるうへは。
うらくはをきものべきうらはなく。妻帯影よりあれどもぜひな
ほうぐ。口ばたうもさく切ておくべくあられれ。又女房の乳
母尼あまも。世をぼけ成まうすなりと。母ぎみ涙をながしく
切殺しまつる。ちとの川水ながれ。血をながしるもかなし。
世よしなんなる人の宮仕。ナニ義くらうまつる。恋慕
しゆくとひねぐるまをおくる女ぞくこれなどなり。辻堂を
なくして。引でこぼきんむぢのつのとよをしかくおもうる女
のなよくと。男よ親ちなくなるもうるまるぞ。もも抱むのよ
いくぐるびきりなきんと。妻帯御母男をふぐ。ぜひとかくる
のくぐつきぐ。ふぎをいひけるれなやうまつらぐしぶさと
き男も独つまぜ引ぬ地ぜや